

明治の気概

対談

拓殖大学学事顧問

渡辺利夫

文芸批評家・

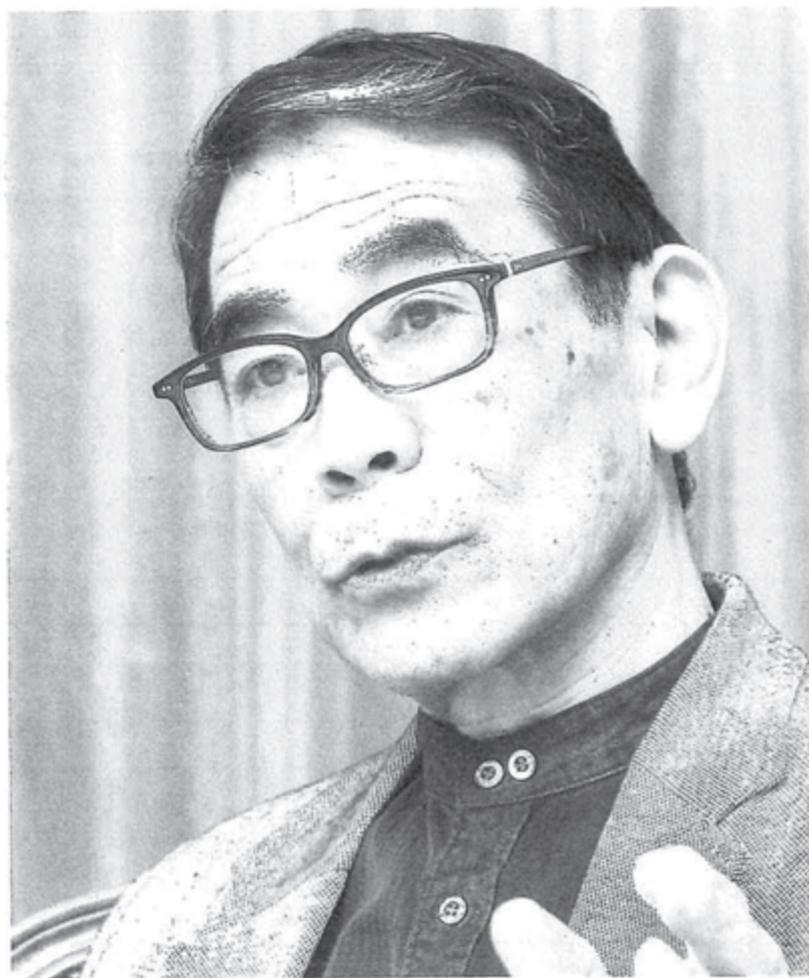
都留文科大学名誉教授

新保祐司



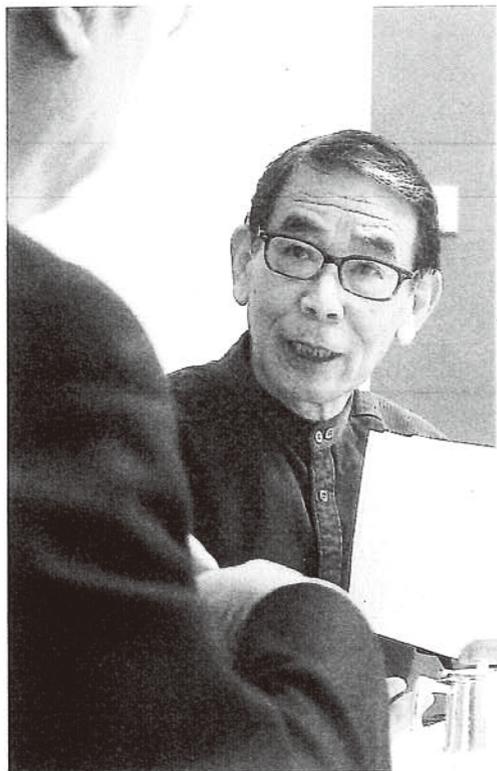
しんぼ・ゆうじ——昭和28年宮城県生まれ。東京大学文学部卒業。『内村鑑三』(文春学藝ライブラリー)で新世代の文芸批評家として注目される。文学だけでなく音楽など幅広い批評活動を展開。平成29年度第33回正論大賞を受賞。著書に『明治頌歌——言葉による交響曲』(展転社)『明治の光 内村鑑三』『海道東征』とは何か』(共に藤原書店)など多数。

近代化という難事業を
僅か四十数年で成し遂げ、
世界の文明国として躍り出た
明治日本。その凄まじいまでの
エネルギーと気概は一体
どこから生まれてきたのか。
それぞれ日本近現代史、
明治の文化に造詣の深い、
拓殖大学学事顧問の
渡辺利夫氏と文芸批評家の
新保祐司氏に、明治精神の神髄、
明治の気概が私たちに
教えるものを縦横に
語り合っていたいただいた。



わたなべ・としお——昭和14年山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業後、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学長、第18代総長などを経て、現職。外務省国際協力有識者会議議長、アジア政経学会理事長なども歴任。JICA国際協力功労賞、外務大臣表彰、第27回正論大賞など受賞多数。著書に『神経症の時代 わが内なる森田正馬』(文春学藝ライブラリー)『士魂—福澤諭吉の真実』(海電社)などがある。

近代日本を築いた



「明治維新は『維新』ではなく『革命』、と言ってよいだろうと思います」

文章を通じて 繋がつている

新保 きょうは、日本の近現代史に造詣の深い渡辺先生と明治時代について語り合えるということでも楽しみにしていました。

渡辺先生との出逢いで一番大きかったのは、やはり二〇〇七年に『産経新聞』の「オピニオンブラザ私の正論」コーナーで一緒に書いていただいたことですね。時々、時事的なテーマに関して一般の方からご意見を募集し、その中から優れたものを選んで紙面に掲載するという仕事を、一年ほど一緒にやらせていただいた。

渡辺 毎月一回はお会いして、よく呑みに行きましたよね（笑）。

新保 ただ、実は私はその少し前から渡辺先生とご縁があったんです。渡辺先生の『神経症の時代』が内なる森田正馬が賞を取られた「第五回開高健賞正賞」（一九九六年）の時に、応募作の下見に携わっていましたね。作品を絞って行く中で、「経済が専門の偉い先生が面白いテーマで応募している」と大変な話題になったんです。渡辺 ええ、そうだったの。その

話は初めて聞きました。

新保 それから私は、渡辺先生はテレビに出て景気がどうだとコメントしているエコノミスト、経済学者とは違う、もっと精神的に深いものをお持ちの方だなという印象を持つようになりました。

渡辺 私の新保さんの印象というのは、やはり、その文章でしようね。内村鑑三にせよ、新渡戸稲造にせよ、同じ人物を評論している人は無数にいるけれども、新保さんの文章からは、技量も含めて非常に共感できるものが伝わってくる。だから、私と新保さんは文章を通じて繋がっているんだろうね。本当にありがたいことですよ。

明治時代だけが 世界史に残る

新保 ところで、渡辺先生のご専門は、発展途上国の経済状況や開発のあり方を研究する開発経済学ですが、日本の近現代史に関心を持たれたのは、何かきっかけがあったのですか。

渡辺 私は、もともと開発経済学の素材を求めて、地を這うようにしてアジアの国々を歩いてきた人間です。ただ、経済学という学問

は、多様な社会現象から一部の経済的価値のみを取り出して、それを専門的、理論的に分析する仕事に主になってくるんです。

それで定年になる頃、そういう仕事だけでは終わりにたくないという気持ちになりました。真実は歴史の中にある、それもそれほど遠くない近現代史の中にあるんじゃないかと考えて、何の基礎知識もなかったのですが、思い切った新しい分野に飛び込んだんです。

そうして、福澤諭吉を中心に明治の文献を生まれて初めて本気になって読み始めたのですが、私はそこで凛とした気概と秩序ある明治という時代を発見しました。その間、新保さんの本も随分読ませていただきましたから、いま振り返っても、歴史に関心を持ってよかったなあと思っています。

新保さんは、どのようなきっかけで明治時代、明治の人物に関心を持つようになったのですか。新保 三島由紀夫が自決したのは昭和四十五年で、私が大学に入ったのはその二年後なんです。要するに、私が青春を送っていたのは、三島が『産経新聞』に「無機的な、からっぽな、ニユート

ラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのである」と書いた日本なわけですよ。ただ私はそういう空っぽな日本で青春を楽しんでいる同世代とどうしても馴染めなくて、とにかく彼らとは全然違うトラックを走っていました。

渡辺 戦後日本の空気に馴染めなかったと。新保 それで、私は高校生の時に小林秀雄の『モーツァルト』に感激しました。その小林の弟子筋に当たる中村光夫の『二葉亭四迷伝』や『明治文学史』などを読み、日本の近代文学の世界に触れたことで、次第に明治時代に関心を持つようになっていったんです。大学に入ってからも北村透谷や国木田独步、島崎藤村など明治の文学者ばかりを研究していました。

特に私が惹かれたのは、明治時代が持つパセティックな感覚、悲劇性なんです。まさに悲劇性こそ、経済的に豊かになって、毎日楽しければいいという雰囲気満ちていた戦後の日本、私の青春時代にないものだったからです。明治は近代化に向かってひたすら上昇していく「栄光の時代」だ

には二百六十もの自律的な藩が存在する地方分権的社会でした。しかし藩を廃して県を置く「廃藩置県」により、地方が中央政府のコントロールの下に置かれるようになった。ですから、「廃藩置県」は、地方分権社会から中央集権国家への転換点なんです。そこから明治政府は、学制発布、国民皆兵、地租改正、殖産興業、富国強兵、帝国憲法発布、帝国議會開設、日清戦争・日露戦争の勝利、不平等条約の改正など、僅か四十数年の間に猛烈な勢いで近代化を成し遂げていく。これは革命以外の何物でもありませんよ。

明治維新の難業は なぜ実現できたのか

渡辺 これから明治時代について語り合う前に、一つ確認しておいたほうが良いと思うことがあるんです。それは、明治維新は、江戸時代の地方分権的社会から天皇親政による中央集権的国家への体制転換だったということです。つまり、薩長を中心とする西南雄藩が古代に淵源を持つ天皇を權威の象徴として戴き、徳川幕府という旧体制、アンシャン・レジームをチェンジした。日本人は激しい言葉を好みませんから、「維新」という大変穏やかな表現を使っていますが、これは「革命」と言うてよいのだからと私は思います。新保 なるほど。

渡辺 そして、この革命の核心になったものは何かというところ、やはり明治四（一八七一）年の「廃藩置県」なんです。それまでは幕藩体制といって、徳川幕府が中央政府の役割を担いながらも、全国

は、多様な社会現象から一部の経済的価値のみを取り出して、それを専門的、理論的に分析する仕事に主になってくるんです。それで定年になる頃、そういう仕事だけでは終わりにたくないという気持ちになりました。真実は歴史の中にある、それもそれほど遠くない近現代史の中にあるんじゃないかと考えて、何の基礎知識もなかったのですが、思い切った新しい分野に飛び込んだんです。そうして、福澤諭吉を中心に明治の文献を生まれて初めて本気になって読み始めたのですが、私はそこで凛とした気概と秩序ある明治という時代を発見しました。その間、新保さんの本も随分読ませていただきましたから、いま振り返っても、歴史に関心を持ってよかったなあと思っています。

一つには、明治の指導者が正確なセルフイメージ、「自画像」を描いていたということ。江戸二百数十年の平和な時代には、日本を植民地化しようとする国がある



明治4(1871)年、視察のため欧米へ派遣された岩倉使節団。左から木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通

例えば、御前会議などで明治天皇がうとうとされると、横にいた山縣有朋がサーベルで床をポンと叩いた。あるいは、明治天皇は西郷隆盛と相撲を取った、足音だけで乃木希典がやってくるのが分かったというようなエピソードが数多く残されています。それはある意味、明治天皇が周囲からかけ離れた存在でなく、体と体でぶつかり合うというか、非常に人間的

で親しみのある君主であったことを示していると思うのですよ。そのような体と体がぶつかり合うような関係、人間的な深い信頼関係があったからこそ、明治天皇を中心軸に国家が一つに纏まることのできたのだと思いますし、明治天皇が崩御された時、乃木希典が夫人と共に殉死するという道を選んだのです。

岩倉使節団に見る 明治の気概

渡辺 先ほど「明治の指導者は正確な自画像を描いていた」という話をしましたが、その自画像を何よりよく表しているのが、岩倉使節団だと思えますよ。日本は明治維新で中央集権国家をつくったけれど、それを具体的にどう運営していくかというノウハウは持っていない。国づくりのテキストなんてないわけですからね。

だから、明治政府は明治四(一八七二)年、岩倉具視を全権大使に、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、留学生を含む総勢百名以上の岩倉使節団を結成し、アメリカやイギリス、フランス、ドイツといった世界各国をおよそ二年かけ

なんてほとんど誰も考えなかった。だから日本人は自分を映す鏡を持たず、自分たちが何者であるかも分からなかったと思うのです。ところが、アヘン戦争で清国がイギリスに敗れる、日本にもペリがやってきて開国を迫られるという「西洋の衝撃」に直面したことで、日本人に「文明の力はこんなにも凄まじいのか」という強烈な自覚、「文明国に対抗するためには自分たちも文明化しなくてはならない」という正確な自画像が描かれた。この自画像が近代化の原動力になっていくわけです。

新保 西洋文明との接触で、日本人としての自覚が芽生えた。渡辺 もう一つは、当時の日本には、新しい体制でも活躍できる優秀な人材がたくさんいたということです。幕末から明治にかけて、なぜあれほど多くの人材が輩出されたのか、本当に不思議でならないのですが、私なりに考えてみますとね、やはり、江戸時代の旧体制が新しい体制の人材、指導者を育てていたからだと思います。

先にも触れましたが、江戸時代の地方分権的社会では、各藩が自律して独自の行政権や裁判権を持

日本近代化の支柱 明治大帝

新保 私は、明治天皇が日本の近代化・文明化に果たされた役割は非常に大きかったと思います。昭和七年に起こった海軍青年将校を中心としたクーデター「五・



「私が惹かれたのは明治時代が持つ『悲劇性』です」

ち、それぞれに人材を育てていました。また薩摩藩や佐賀藩などの西南雄藩、小藩の宇和島藩さえ、当時としては有数の武器を造ってましたからね。その地方で育まれた優秀な人材が、一旦緩急あればという事態になるとパワッと中央に集まり、旧体制をひっくり返し、猛烈なエネルギーで新体制を運営していったのです。まあ、旧体制が新体制の人材を育んだというのは皮肉な現象ではありませんが。

逆を言えば、当時の清国や朝鮮が近代化に失敗したのは、古代的で中央集権的な専制国家だったからだと思います。そのような専制国家では、権力や人材、産業がすべて中央に集中してしまいますから、地方には人材も産業も育たず、旧体制をひっくり返しても新しい体制を運営していくことはできなかったんじゃないでしょうか。

発展に大きな貢献をしました。私は何度か現地に行きましたが、あの時代によくこれだけのものが造られたと感じ入ります。

それから、もう一人紹介したいのが、台湾で稲の品種改良に取り組んだ磯永吉（一八八六〜一九七二年）です。磯は、稲の雄蕊と雌蕊を一つひとつ掛け合わせていくという、一生かけても成功するかどうかさえ分からない、まさに粒粒辛苦の努力を二十年積み重ね、遂に「蓬莱米」に辿り着きます。

これにより、台湾内地の米不足が一挙に解消されていくんです。もう少し言えば、一九六〇年の中頃からアジア全域で「緑の革命」という米の高収獲品種の普及拡大運動が始まり、アジアは「停滞のアジア」から「成長のアジア」へと転換していきます。その淵源を辿っていくと、八田や磯の仕事に繋がってくるわけですね。

新保 素晴らしい功績ですね。渡辺 八田にせよ、磯にせよ、彼らは当時の最高の教育を受けたエリート、専門家でありながら、大卒卒業と同時に海外に渡り、現地で長期の苦難に耐えて頑張ったわけです。台湾のため、それが日本

し、その十年後には、当時世界最大の陸軍大国だったロシアに挑んで皮一枚で勝つわけです。そういう意味では、岩倉使節団が日本の近代化・文明化の基点になったといってもいいかもしれません。

新保 これは明治維新の前の話になるのですが、「薩英戦争」で薩摩藩がイギリスに負けた後、薩摩の若い田舎侍がイギリス人のところに行き、「軍艦を買いたい」と交渉しているんです。そして「なぜ



軍艦を買いたいんだ」と聞かれた田舎侍は、「おまえたちをやっつけるために買わんだ」と答えた。

イギリスはそれに感動し、「薩摩藩はこれから強くなる」と、徳川幕府から薩摩藩に乗り換えて支援するんですよ。一方、フランスは徳川幕府がずっと続くと考えて最後まで幕府についた。イギリス人とフランス人の政治感覚の違いが分かって面白いところです。

要するに、当時の日本人は、ただ単に自分たちが繁栄するためではなく、西洋列強をやっつけるんだという凄まじい気概で西洋文明を取り入れていったんですよ。いまの日本みたいに、何となく「豊かな国でありたい」「先進国でありたい」という程度のやる気だったら、明治維新もなかっただろうし、日露戦争も戦わなかったと思います。もっといえば、日本が戦艦大和を造ってアメリカと戦ったのも必然的な流れだったわけですね。

自分が一日休めば日本の近代化が一日遅れる

渡辺 明治時代にはたくさん的人物が出ましたが、私は日本統治下の台湾を舞台に活躍した日本人の

中に、明治の精神・気概が最も鮮やかに表れているのではないかと、この一年、月刊「正論」に「小説台湾」を連載してきましてね。苦勞しましたがようやく書き上げたんですよ。

ですから、きょうはその「小説台湾」に関係する人物を何人か紹介したいのですが、まず一人目は姫路藩出身の土木工学者である古市公威です。一般的にはあまり知られていませんが、古市は、東京帝国大学内に新設された工科大学（現・東大工学部）の初代学長を務め、後の日本、台湾や朝鮮の治山・治水事業の黎明を告げた人物です。

その古市がフランスのパリに留学していた時に、こんなエピソードが残されているんですね。高熱にうなされながら、夜を日に繼いでひたすら勉強を続けていた古市に下宿の女性が、「あなた、一日くらい休んだら？」と声を掛けた。すると古市は、「私が一日休めば、日本の近代化は一日遅れるので」と答えた。

新保 凄まじい気概ですね。渡辺 その古市の後に続き、日本の近代土木の礎を築いたのが土佐

藩出身の廣井勇（一八六二〜一九二八年）。廣井の大きな功績は、当時一番の難事業といわれた北海道小樽港の築港を、並々ならぬ努力で完成させたことです。その時に造られた日本初のコンクリート製の堤防は、百年以上経ったいまもなお小樽港を守り、現地には廣井の銅像が建てられています。

また、廣井は「廣井山脈」と言われるほど多くの人材を育てたことでも知られますが、その弟子の一人が、パナマ運河の建設に日本人として唯一参加した青山士（一八七八〜一九六三年）です。青山は熱帯病と闘いながら、パナマ運河完成に尽力し、最後は副技師長にまでなりました。帰国後は、荒川放水路や大津分水路の工事に携わり、大津分水路の竣工記念日には、「人類ノ為メ國ノ為メ」という碑文を刻んでいます。

新保 青山が高い志で仕事に取り組んだことが伝わってきます。渡辺 そして廣井を師、青山を先輩として仰いで世に出たのが八田與一（一八八六〜一九四二年）です。八田は、台湾南部の嘉南平野に鳥山頭ダムを十年の歳月をかけて完成させ、現地の治水や農業の



古市公威
嘉永7(1854)年〜昭和9(1934)年。土木工学者。日本の土木工学、土木行政の近代化に尽力した



内村鑑三
万延2(1861)年〜昭和5(1930)年。キリスト者。無教会主義を説き、「代表的日本人」[余は如何にして基督信徒となりし乎]などを著した

「自律自助」ではありません。渡辺 おっしゃる通りですね。新保 やはり明治の人は皆、内村たちのプロテスタントイズムに限らず、何かしらの信仰を持って生きていたのだと思うんですよ。

出光興産の創業者・出光佐三（一八八五〜一九八一年）も非常に神社信仰の厚い人で、平成二十九年に世界遺産に認定された地元の宗像大社を莫大な資金を投じて再建しています。そして、「境内に記念碑や銅像を建てますか」と聞かれた出光は、その申し出を断固として拒んだ。ただ、手水鉢石に「洗心」という二文字を署名なしで彫っただけです。これなどはまさに「[I]」の精神であり、信仰心があっただけでできたのだと思います。

そして、そういう人々が全国の地方にたくさん存在していたのが、明治という時代だったのです。

例えば、内村鑑三が亡くなった時に、全集が岩波書店から予約出版されました。すると、たくさんの子約注文が来て岩波書店は驚くわけですが、それはただ数が多かったからではなく、注文の多くが、大学教授や東京の学生では



陸奥宗光

天保15(1844)年~明治30(1897)年。外相として日清戦争に携わり、日本の近代外交を開いた



児玉源太郎

嘉永5(1852)年~明治39(1906)年。陸軍軍人。日露戦争では満洲軍総参謀長として活躍した

なく、地方の校長先生や駅長さんから来たことに驚いたんです。

だから、明治日本は、人間が生きていく上で何が最も大切かを理解できる人たちが全国の地方にたくさん存在していた、高級な国家だったと私は言っているんです。

渡辺 フランスの人類学者にレヴィ・ストロースという人がいます。来日してました。それで、彼が大島を訪れた時に、貧しい農村の女性たちが休日に生け花を嗜んでいることを知って、非常に驚いたというんです。

フランスの農村には休日になんか洗練された趣味を持っている人はいないと。このエピソードも新保さんがおっしゃったことに通じると思いますね。

新保 そのことを具体的に示して

くれる人物は、軽井沢の星野温泉の三代目・星野嘉助でしょう。

当時の星野温泉は、島崎藤村や与謝野寛(鉄幹)・晶子夫妻、内村鑑三など名だたる人たちの定宿になっていました。それである時、星野温泉を訪れた内村鑑三は、二十代だった若き嘉助に『成功の秘訣十か条』を書き与えるんです。

それは「自己に頼るべし、他人に頼るべからず」「成功本位の米國主義に倣ふべからず、誠実本位の日本主義に則るべし」「濫費は罪悪なりと知るべし」といった、世俗的な成功とは縁遠い内容だったのですが、嘉助はその価値を理解して代々の家憲にするんですよ。

だから、現代のようにこの大業を出たとか、成績がいいとかそういう基準で、本当に人間を評価することはできないんです。

日本人一人ひとりが英雄だった

渡辺 ここまで、いろんなアングルから明治について論じてきましたが、外交や安全保障に関する人物にはあまり触れてきませんでしたが、ですから、最後にぜひ明治外交を担った希代の外交官・陸奥宗光のことを話してみたい。

新保 陸奥の功績はもともと多くの人に知ってもらいたいですね。

渡辺 陸奥は外相として日清戦争の開戦から戦時、戦後外交までの全局に携わった人物ですが、日本が勝利して下関条約が結ばれるとほとんど同時に、ロシア・ドイツ・フランスによる「三国干渉」が始まり、最大の戦利品である遼東半島を返還することを迫られます。その時、陸奥は末期の肺病のため温泉地で療養していたのですが、駆けつけた伊藤博文と議論の末、泣く泣く列強の要求を呑むんですね。

それで陸奥は、東学党の乱から日清戦争、下関条約、三国干渉に至る経緯を記した『蹇蹇録』を書き始めるわけです。その最後にあるのが、「畢竟我にありてはその進むを得べき地に進みその止まらざるを得べき地に進みその止まらざるを得ざる所に止まりたるものなり。余は当時何人を以てこの局に当らしむるもまた決して他策なかりしを信ぜんと欲す」という有名な一文です。私はこの一文に、陸奥がどれだけの決意で外交に臨んでいたかが凝縮されているように思っていますよ。

そして、外交というものは所詮国力の問題、軍事力の問題なんだというリアリズムをもって明治政府は「臥薪嘗胆」を掲げ、「三国干渉」の屈辱に耐えながら、次の戦いに備えるべく打って一丸、国力増強に取り組んでいったのです。もし「三国干渉」での陸奥の判断とリアリズムがなければ、日露戦争に勝てたかどうか分かりませんが、日露戦争に負けていたらいまの日本は確実にありません。

新保 いま渡辺先生がおっしゃったように、日露戦争が明治のクライマックスであったことは間違いないですね。それで、私が日露戦争で活躍した人物からあえて一人を選ぶとすれば、それはやはり陸軍中将の立見尚文になります。

立見は熊本第六師団と共に最強の師団とされていた弘前の第八師団の師団長です。もし立見師団

二万が、夜間、雪の降りしきる満州を不眠で急行軍して救援に駆けつけなければ、「黒溝台の戦い」に日本軍は敗北し、日露戦争の勝敗もどうなったか分からなかったといわれています。そして私が感動したのは、その急行軍の最中、二万のうちただの一人として落伍者

内村鑑三「成功の秘訣」

- 一、自己に頼るべし、他人に頼るべからず。
- 一、本を固うすべし、然らば事業は自づから発展すべし。
- 一、急ぐべからず、自働車の如きも成るべく徐行すべし。
- 一、成功本位の米國主義に倣ふべからず、誠実本位の日本主義に則るべし。
- 一、濫費は罪悪なりと知るべし。
- 一、能く天の命に聽いて行ふべし。自ら己が運命を作らんと欲すべからず。
- 一、雇人は兄弟と思ふべし。客人は家族として扱ふべし。
- 一、誠実に由りて得たる信用は最大の財産なりと知るべし。
- 一、清潔、整頓、堅実を主とすべし。
- 一、人もし全世界を得るとも其靈魂を失は、何の益あらんや。人生の目的は金錢を得るに非ず、品性を完成するにあり。

が出なかったということですよ。これが明治人の気概なんですよ。

渡辺 しかも米は凍ってしまって食べられなかったらしいですね。

新保 それに長く馬に乗っている足が凍って腐るので、当時六十歳の立見も時々馬から降りて歩いたそうです。だから、司馬遼太郎が『坂の上の雲』で言っているように、日露戦争は一人の英雄がいたからではなく、数百万の日本人全員が英雄的精神で生きていたから勝つことができたのだと思います。

渡辺 ああ、日本人一人ひとりが英雄的精神で生きていた。

新保 もう一つ日露戦争で感動したのは、激戦の末、旅順の二〇三高地を日本軍が占領した時の会話です。児玉源太郎が電話に取りつき、「旅順港は、見おろせるか」と尋ねると、山頂の将校が「見えません。各艦一望のうちにさめることができません」と答えた。これこそ、まさにどんな戯曲家にも書けない名台詞、演劇的言葉です。

明治時代に劇的な文学や演劇があまり生まれなかったのは、明治という時代そのものが劇的だったからですよ。そもそも演劇を書く

必要がなかったのです。

明治時代は遠い過去のことでない

新保 今回の『致知』のテーマは「自律自助」ですが、先にも述べたように、現代人が明治時代から学ぶべきなのは、やはり「己のために生きる」という「I for I」の精神だと思えます。「I for me」では自律自助の人生、社会も国家も実現することはできません。

また、「I」だけの個人主義は、「自律自助」とは似て非なるものです。「I for I」のある「I」。「I for I」でなくてはならない。

渡辺「I for I」の精神を別の表現で言えば、「公」「利他」ということになるのでしようが、長い日本の歴史の中で明治ほどそうした観念が生きていた時代はなかったのではないかと私も思います。個人の栄達と国家の興隆が矛盾なく収まっていたのが明治時代だった。

新保 全く同感ですね。

渡辺 ただ、問題は「公」「利他」といった明治の精神をいまの日本人が共通感覚として持てるかどうかです。それは、いくら言葉や規範論で伝えてもだめだと思っていて

すよ。やはり、明治は遠くに過ぎ去った時代ではなく、つい先立って現実に存在していたんだという感覚を覚醒させる、知的な作業が必要になってくると思います。

私の家には、母方の祖父が日露戦争に出征する日の朝に撮影した家族写真があるんです。祖母が抱いている女の子が私の母ですから、明治といってもそんなに遠い昔のことではない。だから、私には血脈を通じて明治と繋がっていると

いう感覚があるんですよ。

新保 渡辺先生は血脈とおっしゃいましたが、先人たちと縦の線が繋がっているという感覚を持つこととは、人間が自律して生きていく上で非常に大事なことです。

いま明治天皇の誕生日である十一月三日は「文化の日」になっていますが、私はそれを「明治の日」にしたいと思っていますよ。そのように、機会を捉えては明治の先人たちの精神・気概に触れ、私たちは彼らと縦の線で繋がっていることに思いを致す。それが、日本人一人ひとりが明治の気概を取り戻し、日本が再び高貴な国になっていく契機になると私は信じています。